

6 (参考調査) ミニトマト「純あま」の品種特性調査

試験の目的

市内の生産者が契約栽培しているミニトマト「純あま」は、良食味で需要も高いが、1果重が低く収量性が劣る点が課題となっています。これを改良した「純あま秋冬」はグリーンバック果（ガク部周辺の着色不良）が発生しやすいとの情報があることから、両品種の特性を調査するとともに、遮光によるグリーンバック果の発生の軽減を検討しました。

供試品種

- ・純あま（標準品種）：サントリーフラワーズ(株)
- ・純あま秋冬：サントリーフラワーズ(株)

栽培経過

播種日*	定植日	遮光資材展張	収穫開始	収穫終了
3月11日	5月7日	7月4日	7月4日	10月7日

* 播種は200穴セルトレイ、鉢上げは13.5cm透明ポリポットを使用しました。

調査区の設定

(1) 慣行区

地域慣行の栽培管理を行う区（遮光なし）

(2) 遮光区

収穫開始から収穫終了まで遮光資材を常時展張する区(図1)



図1 遮光資材使用状況

耕種概要

(1) 作型：雨よけハウス栽培

(2) 栽植密度等：床幅90cm，2条植え(株間45cm)，主枝1本仕立て，250株/a，
反復なし，グリーンマルチ，遮光資材（遮光率30～35%）を使用

評価指標

生育調査（発芽，開花，果房形，草丈），収量調査（収穫量，規格別果数割合），品質調査（外観形質，糖度(Brix)）について評価を行いました。

試験結果

(1) 品種特性（表1，図3）

ア 生育調査及び収量調査結果

表1 調査結果

品種名	調査区	開花期 *1 (月日)	果房形*2 (W果房以上の割合) (%)	総収量 (kg/a)	良果 収量 (kg/a)	不良果 収量 (kg/a)	良果収量 割合 (%)	良果 果数 (千個/a)	良果 1果重 (g)
純あま	慣行区	5/5	45	753	661	92	88	79	8.4
	遮光区		38	582	495	87	85	54	9.2
純あま 秋冬	慣行区	5/8	45	968	582	386	60	41	14.2
	遮光区		22	705	428	277	61	30	14.3

*1 開花期：50%の株で第1果房の第1花が開花した日

*2 果房形：調査株数（6株）における平均値

イ 試験栽培を通じて得られた主な品種特性

品種名	長所	課題
純あま	<ul style="list-style-type: none"> ・開花が3日程度早い ・不良果の発生が少なく良果率が高い ・裂果しにくい ・高糖度 (Brix が 10%程度) 	<ul style="list-style-type: none"> ・1果が小さく収量性が低い ・生育後半は規格外の小果が多い
純あま秋冬	<ul style="list-style-type: none"> ・1果が大きく収量性が高い ・高糖度 (Brix が 10%程度) 	<ul style="list-style-type: none"> ・不良果の発生が多い ・裂果に弱い ・グリーンバック果が発生しやすい ・果皮の光沢が弱い

ウ 考察

本調査では、「純あま秋冬」の収量性の高さは確認できましたが、一方で良果割合の低さが明らかとなりました。その要因としては、果実の温度上昇により発生するグリーンバック果や8月下旬以降の昼夜の温度差により発生する裂果などの不良果の増加であることから、「純あま秋冬」の栽培は、ハウス内の温度管理に十分留意する必要があると考えられました。

(2) 遮光による効果

ア 収量性 (表1)

調査区比較では、いずれの品種も総収量，良果収量ともに遮光区が20～30%減収となりました。しかし，良果収量割合は調査区間の差は見られませんでした。

イ 規格別果数割合 (図2)

果数割合からは、いずれの品種も遮光による不良果の軽減効果は確認できませんでした。

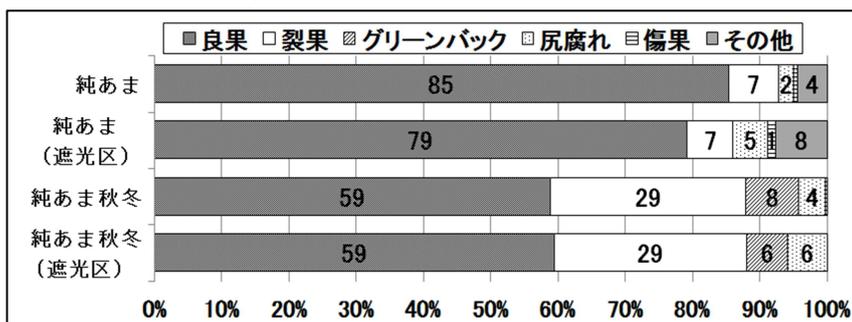


図2 規格別果数割合 (%)



図3 純あま (左), 純あま秋冬 (右)

ウ 考察

遮光によるグリーンバック果の軽減効果が認められなかった要因は判然としませんが、ハウス内の一部遮光では果実への直射日光は遮るものの、ハウス全体の温度に影響を受け十分な降温効果が得られなかった可能性が考えられました。また、遮光資材の常時展張は収量に大きく影響することが示唆されましたので、遮光資材の使用にあたっては生育期間中の常時展張は避け、盛夏期の特に高温期での使用が望ましいと考えられました。